

### 人間の幹細胞の治療を目的とした取り扱いについて

北原 隆 (ベルギー出身、上智大学理工学部名誉教授)

人間の幹細胞は、さまざまな肉  
体組織に成長する可能性を持つこと  
が知られ、病気に冒されたさまざま  
な器官の、機能を失った細胞をよみ  
がえらせる可能性を提供していま  
す。したがって、これまで死に至る  
病とされてきた病気に苦しむ人々に  
とって新たな希望となつています。

しかしながら、幹細胞の使用  
は、いくつものデリケートな倫理的  
問題を引き起こします。

1. まず、忘れてはならないのは、  
少なくともこれまでのところ、幹細  
胞を用いた医療技術は、永続的価値  
のあるものとしてはまだその開発が  
証明されていないということでは  
ありません。たしかに多くの人が期待を寄せてい  
ますが、その期待するところは、い  
まだに仮説に大きく依存しているの  
です。

2. また、幹細胞を採取するのは、  
多くの場合、発達の初期段階にある  
人間の胎児、ヒト胚からで、その結  
果、必ず胎児の死を伴います。した  
がって、ヒト胚からの採取と使用  
は、成長している人間の生命を殺す  
ことを常に前提としています。ここ  
で生じる疑問は次のものです。「人

間のいのちの尊厳は、これほどの  
犠牲をゆるせるものだろうか？

新たな治療を目指すために支払わ  
れる代価は、あまりにも高いもの  
ではないか？」言い換えれば、「そ  
のような治療のために、これほど  
高い代価を払う価値があるのか？」  
という疑問です。

3. これらの問題について考える  
とき、やはり大切なことは、幹細胞  
がヒト胚からだけでなく、さまざま  
な成人の組織からも採取できる  
ということとです。例えば、骨髄、臍  
帯血、胎盤などです。その上、これ  
らの幹細胞はすでに、多発性硬化  
症、パーキンソン病、脊髄損傷、そ  
の他の病気を患う人々の苦しみを

軽減しています。

以上の事実を踏まえると、厚生労働  
省は、幹細胞の採取源として、より  
倫理的な問題の少ないこのもう一つ  
の選択肢に研究者たちの注意を喚起  
し、ヒト胚からでない幹細胞を用い  
た治療の開発を奨励する必要が明ら  
かにあると言えます。そうすること  
によって、常に初期の人間の生命を  
犠牲にすることを意味するヒト胚の  
幹細胞の使用よりも、あらゆる段階  
の人間の生命を尊重するというより  
一貫性のある姿勢を取ることができ  
るでしょう。また、すでに認可され  
た脳死の人からの臓器移植に関する  
法律にも、より調和するでしょう。

### 生命を守る誓い

人はみな例外なく、国籍・人種・  
性別・肌の色や信条、才能にかかわ  
らず、ひとりひとり神の姿を形  
どって創られている。神にとつて  
生命が貴重ならば、私にとつても  
勿論貴重なものである。

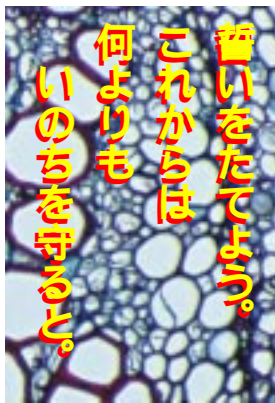
生命の恵みを通して神は私達に、  
献身的で忠実で責任感の伴う愛の

中において、新たな生命を作り出す  
能力を与えて下さった。結婚とそれ  
によってできた家庭は、個人と社会  
に豊かさをもたらす最小の集団であ  
る。

それゆえ、生まれる前、生まれた  
後にかかわらず、私自身の生活と人  
間関係の中で出会うつすべての生命を

また、人間の臓器の商品化と利潤  
のためのその使用の危険性につい  
ても考慮されなければなりません。  
市場経済の手法が、人間の幹  
細胞の大量製造技術を開発した  
り、人間の受精卵を生産するため  
に女性の卵子を売買したりする方  
向へと影響力を振るうことが容易  
に予見されます。

ヒト胚の幹細胞の生産と使用をコ  
ントロールする法律は、人間の臓  
器の商品化を防ぐ機会になるで  
しょう。その商品化の現象がすで  
にアメリカで現れていることは、  
MEXのテレビ番組で伝えられた  
とおりです。



尊重し、守っていくと心の底から  
誓いたい。常によく考えて話し、  
責任ある行動をとりたい。結婚と  
家庭を尊重し守っていくために  
も。

(Voices for life #39p35)

# 「ヒト胚の取扱いに関する基本的考え」

しばらく前に、NHKの番組で内閣府が広く意見を募集していることについて知りました。私は科学的なこと、法律的なことなど、専門的なことは詳しく知りません。しかし、普通の人が自分の体験に基づいて意見を言うてよい、専門家だけでなく、広く一般の人が意見を寄せるべきだ、という番組での話に励まされました。

私はキリスト教のカトリックの信者です。生命倫理の問題は、カトリック教会でも重要なテーマであり、教会の中にはこのテーマを専門とする神学者もいます。私自身は詳しい神学的な考察について無知ですが、教会は信者に対して、「人のいのちは受精の瞬間から始まる」と教えています。教会の立場としては、生物学など、科学的根拠ののっとしてキリスト教の立場から人間を理解するというものだと思います。このことを前提として、私のちよつとした体験から得た理解について意見を述べたいと思います。

あるとき、仕事の帰りにほんやりと乗り物にゆられながら、「人のいのちは受精の瞬間から始まる」という教会の立場につい

て考えていました。私自身は、信者としてこれを受け入れるつもりで、そのために何か困難が生じることがあっても立ち向かわなければと思っていました。でも、社会には、胎児がいつから人間か、ということについてさまざまな意見があります。私はそのことについて、実感に基づいた確信があるわけではありませんでした。もし目の前に、切迫した悲しい状況で望まない妊娠をした女性がいたら、私はその人に何を言えるだろうか。頭で考えただけのことは、あまりにも冷たく、私自身が実感のないことをどうして人に伝えることができるだろうか。そのとき、真実なら答えがあるはずだと思いい、神さま、教えてください」と願いました。

青春も満喫しながら、無事に国家試験に合格して医者になりました。大変だけれどもやりがいのある仕事に打ち込んでいた妹は、35歳のときに癌のために亡くなりました。その妹のことを思い出していたとき、突然、もしタイムスリップして、妹が受精した瞬間に戻ったらという考えが浮かびました。妹のいのちは始まったばかりです。でもそれは確かに妹で、ほかの人ではありません。そのとき、もし何者かが妹のいのちを亡きものにしようとしたら……私はそのときはつとしました。私は自分の身を挺してでも、妹のいのちを守るために闘う、と思ったのです。受精のときに始まり、途切れることなく続くいのち、成長し、母親の胎内から外の世界に生まれ、さまざま人と出会い、いろいろな体験をする人生。この世での妹の人生は終わってしまったけれども、その一瞬一瞬が、尊いものです。考えてみてください、連続と続くいのちの時間のどの一瞬を切り取ったとして、その一瞬に代わるものは、全宇宙を探しても、また永遠の時間を探しても、ほかにないのです。私や家族にとり、妹の生きたいのちは何も

のにも代えがたい尊い大切なものだということが、私にはわかりました。ましてや愛である神は、一人ひとりのいのちをどれほど無条件の愛をもって見つめているだろう。私たちがいのちを殺すとき、あるいは人の存在を否定するとき、それは、その無条件に差し出される計り知れない愛を裏切ることだ、と私はそのとき悟りました。いのちは愛されている、愛されたから存在するようになった、ふだんはなかなか考えることのない、私たちの存在の本当の姿、ありのままの姿が、そのとき見えたように思います。

したがって私の意見としては、あらゆる意味でヒト胚を利用するようなことはあってはならない、というものです。中絶や安楽死についても言えることですが、それは、この世に生を受けて生きていく私たち、すべての人の存在の肯定・否定にかかっていると私思います。私たちは誰一人例外なく、存在をありのまま肯定されなければなりません。親の無条件の愛情を受けたとき、子どもは健やかに成長します。私たちは、自分の存在を条件つき（外見、お金、地位）でしか肯定できないとき、不幸になります。いじめや自殺の根本原因も同じではないかと思えます。医療のため、という理由も挙げられるかもしれませんが、自分のいのちを救うためにほかのいのちを犠牲に、という社会であってはならないはずで、医療の進歩のためには、必ずほかの道が見つかると思えます。すべての人が、根本的に存在が肯定され、安らかな気持ちになれる社会、そのために、ヒト胚の問題は重大です。

今、ニュースをにぎわせているオウムの問題がありますが、科学の力で何でも思い通りにできると考え、いのちを軽んじる精神は、オウムの驚くべき醜い姿に似ていると思いませんか。国家百年の計どころか、今の私たちの生き方、そして日本の社会がいのちを肯定するものになるか、否定するものになるか、時間では計れない大変な選択がかかっていると思つたのです。

参考：カトリック教会の文献として次のような公文書があります。

『フマネ・ヴィテ』  
パウロ6世

『いのちの福音』  
ヨハネ・パウロ2世

『いのちへのまなざし』  
日本カトリック司教団  
多摩市 佐倉 泉



質問：どこまでならOK？ キスはいいの？

答え：体の触れ合いはセックスへの前奏曲ともいえ、抑制しがたい強い欲望を引き起こしかねません。性交渉の結果にまだ責任が持てない結婚前のカップルは、自制し、もっと「清い」交際をすべきです。友情が発展したふたりの交際にひびが入らないよう、慎重に冷静に。

不必要な体の接触は避けましょう。互いの体に親しみがわくと、愛情を体で表現したくなりがちです。キスなど、セックスに結びつきそうな接触を避けるのは言うまでもありません。手をつなぐまで、が原則です。



## そこに平和が！

寿命を全つする。そこに平和がある。私は三者の立場を考えてこの結論に至りました。

この度、胚性幹細胞利用に関するパブリック・オピニオンを募集されたことは、科学者の皆様がそこに他者のいのちが宿っていることを御存じだからではないでしょうか。人は、井戸から水を汲み上げることの大変さに水道を作った時、一般の人々に相談することもなくそれを行いました。他者に危害を加えることがないからでも、この問題はそのような問題ではありません。そこにいのちがかかっています。もしこの問題が、多数決によって行われたなら、これから先、科学者の皆様は他者のいのちをあやめていることを知りながら、それを行うことになりません。それでは科学者の皆様は真の平和を味わえないでしょう。中絶医の苦悩はここから来ているのです。

人として、この苦しみから逃れたいと願うのは当然のことでしょう。でも何の抵抗も出来ない人からそのいのちを奪ってまで、自分の欲求を満たしたいですか？人にはそれぞれ、寿命が与えられていると思います。そのように聞けば、冷たいように聞こえるかも知れませんが、他者のいのちを奪ってしまった後に、そのことを気づけば、そこに平和がありません。中絶した女性の苦悩はここにありません。科学者の皆様、科学は日進月歩です。どうかこの苦しみから逃れる方法を発明して下さい。でも他者のいのちを奪わないで！

科学的の進歩に貢献したいと声をあげる科学者、この苦しみを取り除いて欲しいと声をあげる病の人々、でもここにもう一人、声をあげることが出来ないけれど、確かに叫びをあげている無数の人々がいます。胚性幹細胞と言われますが、女性の子宮で守られて、時が満ちると私たちと同じ人間として誕生日を迎える人々です。胚性幹細胞利用の実験によっていのちを奪われたくないのです、寿命を全うしたいのです、と叫びをあげています。中絶でいのちを奪われる胎児の苦しみはここにありません。そこには平和は届いていません。長い目で見る時、この胚性幹細胞利用はそれに関係する三者にとって決して平和を得られることではありません。私たちが今行っている中絶の問題を見れば明らかです。私たちは平和を望みましよう！胚性幹細胞利用に反対です。

## 破壊主義的な調査から 保護すべき赤ん坊

合衆国議会のたくさんの人たちが、この調査は結局禁止されるだろうと考えています。この状況において禁止令は正しい決定です。なぜなら、科学者達がつかつにも神にいたずらをしかけるかもしれないからです。

協議事項を変更しているたくさんの違った派閥争いは、どの時点で胎児は人間になるのか、そして、人間の絶対的権利の保護のものになるのか思索しています。ある人はそれが受精の瞬間と言い、またある人は心臓の鼓動が打った時と言います。

しかしながら、何が人間の特徴かと言えば、魂です。魂は人間と動物を区別するもので、そこが、それぞれの人間に永遠の価値がある場所です。それでは、幹細胞調査において、これは何を意味するのでしょうか？この調査は寄付された卵子を受精させ、約6日間それを成長させることを必然的に伴います。この時点で、幹細胞は胎児から取り除かれ、残りは廃棄されます。これらの幹細胞は、治療上の目的のために取り出されて、個々の内臓を作るために利用されるでしょう。

高知市 大岡 滋子

# 日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

〒780-0862 高知市鷹匠町2-1-33

(新住所です)

電話/Fax: 088-873-3619

e-mail: prolife@i-kochi.or.jp

http://www.japan-lifeissues.net

For English Speaking People / evening: Tel/Fax: 088-843-0406 Email: jerry@star.quolia.com

## 事務所時間:

月一金 10:00 - 17:00

土曜日 休み

日曜日 休み

## 会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円  
一万円 五千円 一千円

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さいいのちを大切に育みましょう。

## 御送金

銀行: 四国銀行朝倉支店

口座番号: 0573553

日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局: 「郵便振替」

口座番号: 01660-5-39607

日本プロ・ライフ・ムーブメント

## 事務所便り

この事務所たよりを人力している今は、爽やかな五月です。それが過ぎると、じめじめとした梅雨、そしてキラキラと太陽が輝く八月になり、このニュー又は皆様の手に届くことになるでしょう。お元気でしようか。お伺い申し上げます。

とぎれることなく繰り返し続く季節、そして私たちのいのちもバトンタッチを繰り返しながらももうどれ位続いてきたことでしょうか。そして、これからも続いていくことでしょうか。

『是非、皆で内閣府に意見を送りましょう!』とのちらしをプロ・ライフ・ニュース二月号に挿入しましたが、送っていただけたことと思います。あれから、多摩市の佐倉さんと東京の順天堂大学の集会でお目にかかり、書いて下さった記事を分かち合いの為にプロ・ライフの事務所にも送って下さらない?』とお願したところ、彼女がご存知の生物学者・北原隆神父様の文と両方送って下さいましたので、事務所の大岡の文とともに、『ヒト胚の取扱に関する基本的考え方』に応募した三つの記事を今月号に掲載致しました。きっと、もつともつと送って下さった方がおられると思っています。そして、又、内閣府に送っておられなくても何かいのちに関する様々なお考えがあることでしょうか。お友達との話で、そのお友達が話したいのちのことをそのお友達に『こんな運動があつて、記事をお願いしているよ...』とお知らせいただけませんか。もちろん、締め切りが過ぎてしまったなどと考えずに、御自身の考えをいつでも送っていただければ事務所はうれしです。そのようにして、このいのちのためのニューズレターはこの日本でもつともつと確かな成長を遂げて行くでしょう。

今、一冊の本を図書館から借りて読んでいます。題は、『まつを唄 百歳を生きる力』。夏を元気で楽しみましょう。

(日本プロ・ライフ・ムーブメント)

(3ページから)

この過程で、注目すべき段階とは、胎児が廃棄されることです。彼あるいは彼女は予備の部分だと考えられて、そして廃棄されます。この胎児と自然に産まれる胎児との間に違いはありません。もし、子宮の中へ戻されたら、彼あるいは彼女は成長し、独立した人間になります。彼女は成長し、独立した人間になります。これらの胎児が妊娠した瞬間から、彼らは存在する権利があります。幹細胞調査のある支持者は、彼らはただの「細胞のかたまり」で本当の人間ではないので、これらの胎児は権利がないといいました。しかし、肉体的に私達人間は細胞のかたまりにほかならないのです。何が私達の特徴を表わすかと言えば、永遠の魂であり、どの時点でこれらの胎児は魂と一致したものとなるでしょうか。多分、受精した時点でそれらは統合されます。もし、それが真実なら、子宮の外にいる全ての人間に与えられている存在の権利が彼らには絶対的にあります。幹細胞調査はやがては臓器移植が必要な人々や、病気で苦しんでいる人々のいのち

## 『プロオ』沈黙の叫び』を見て

### たとえ小さな生命だって

私は絶対中絶したくないと思った。折角この世に生を受けた生命を、第三者の手によって絶たれるのはとても悲しいことだと思った。誰でも生きる権利はあると思う。たとえ4ヨヨの小さな生命だって、生きる権利はあると思う。自分の都合だけで、新しいいのちを殺してしまうのはとても悲しいことだと思う。頭

ちを救うことになるかと幾人かの人はちを救うことには言いません。しかし、なぜ、独立した人間が必然的に独立した人間になるのであるう胎児よりもより多くの権力をふるうのでしょうか?両者とも魂を持ち合わせていて、ただ片方は大きなかたまりに对立するものとして小さな細胞のかたまりなので傷つきやすいだけです。

幹細胞調査に関する問題は、どの時点でこれらの胎児が神によって存在を認められるのかを私達が知らないという事です。聖書では、神は私達が母親の子宮内にいる間は我々を堅く結合すると言っています。これは、我々の存在は我々が外の世界に出て行くずっと以前から始まるということをはめかしています。

この半信半疑のことは私達に胎児を人間として考えるという義務を負わせています。なぜなら、私達全員がそうかもしれないと認識しているからです。

妊娠中絶反対の情報ネットワーク

を砕くようなそんなかわいそうなことは私はして欲しくありません。赤ちゃんだって逃げようとしていたし、恐いんだと思う。そもそも人口減少の現代に人を殺すというのは、はつきりいつて間違いだと思う。

T・Mさん(高三生)